産経新聞

平成２３年２月２２日（火）朝刊２１面

関西防災

「自然」は予想通りのシナリオにならない

地球温暖化の進行によって、極端な現象が目立つようになってきた。今冬の豪雪もその一例だろう。

しかし、過去にはあのような大規模な自動車の渋滞は起こらなかった。三八豪雪と命名されているように、昭和38年に雪害はあった。当時、自動車がそれほど普及していないこともあり、鉄道の不通が話題になる程度だった。

学生のころで、大みそかに白山の山小屋に大雪で閉じ込められ、ほうほうの体で元日の深夜に下山。国鉄福井駅に着いてみると、北陸本線が豪雪で不通になっており、駅の待合室でさえない正月を経験した。

文明が進むと、災害による被害はむしろ大きくなる。なぜなら、私たちの生活文化である防災・減災の努力がそれに追いつかないからである。最近はそれだけでないこともわかってきた。文明が進むと、自然外力も大きくなり、挙動も想像を超える。

コーヒーや砂糖、小麦粉の国際価格が上昇しており、いずれわが国の茶の間を直撃すると心配される。この原因の一つは、オーストラリアを襲った、過去1世紀で最大規模の巨大サイクロン「ヤシ」や、ブラジルで発生した千人以上が犠牲になった大洪水、アメリカ合衆国の干魃などの異常気象などである。

これを単なる〝異常〟ととらえるだけでは不十分ではないだろうか。なぜなら、極端現象を起こす下地は、人間が作っているということを忘れてはいけないだろう。

自然からみれば、台風と同じ仲間のハリケーンやサイクロンの中心気圧とか、累積降雨量について、年々、「日本記録」や「世界記録」を生み出す環境が整ってきているのである。

私たちが各種スポーツの記録を更新したいのと同じように、「自然」も新しい環境下で、日本記録、世界記録をねらっていると考えると、わかりやすいのではないだろうか。

現在、霧島の新燃岳が活発な噴火活動を継続している。いつ終息するか、皆目、見当がつかない。江戸時代以降、今回を含めて6回噴火しているが、1716年11月から始まった享保噴火は、約1年後の9月まで継続したことがわかっている。

今回の噴火活動がこの程度で終息しない場合も考えた、長期防災・減災対策が必要だろう。

「自然」は私たちが予想する通りのシナリオに従ってくれるわけではないのである。

最悪のシナリオを考えた、早め早めの対応こそがもっとも大切ではないだろうか。宮崎県は口蹄疫に始まり、鳥インフルエンザでも大変な被害を被ってきている。今回の噴火活動の被害が軽微に終わることを心から願いたい。

（河田惠昭・関西大学社会安全学部長）